

農と食と場で人をつなぐ。内でも外でもない地域のコミュニケーション空間

「風のえんがわ」の取り組みについて

Connecting people through agriculture, food, and place. A community communication space that is
neither inside nor outside.

KAZENOENGAWA

池上柚月*¹, 村川真紀*², 山田あすか*³

IKEGAMI Yuzuki, MURAKAWA Maki and YAMADA Asuka

An old folk house café built by renovating a sericulture hut. After the renovation from a sericulture hut to a private house, the owner himself was involved in the renovation such as painting the walls with paint, and it was reborn as an old folk house. When you go up the dirt floor, there is a tatami room as the audience seat, and a desk and chair in the former veranda, making it a space where multiple generations from children to the elderly can spend a comfortable time. The garden at the end of the veranda is full of greenery and is also a space for children to play.

*Keywords: Community Cafe, Regional Revitalization Activities, whereabouts,
Town development*

コミュニティカフェ, 地域活性化活動, 居場所, まちづくり

1. 概要

本稿では、人口減少の進行が著しい島根県江津市にある、古民家をリノベーションして地域の活性化や居場所づくりを提供している「風のえんがわ」の取組について報告する。

近年、全国各地で超少子高齢化を背景に限界集落等での生活サービス機能の維持を図るため、地域住民が主体となり愛着のある地域に居住し続ける方法として国土交通省と内閣府が管轄する「小さな拠点」^{注1)}事業が推進されている。これと少し異なるバリエーションとして島根県では、「小さな拠点事業」を発展させた、地域交流拠点である「公民館」を中心に1つのエリアを形成し、これらを連携させて政策展開する手法を提言・実践している¹⁾。特に江津市では地域活性化のために「創造力特区へ」というスローガンのもとにはじめた「Go Gotsu!プロジェクト」という取り組みがある。

江津の住民や「風のえんがわ」のように江津で商売を営む人々の思いが繋がり、自然と進められている取り組みであり、集会や話し合いといった自主的な取り組みに「風のえんがわ」も参加している。

現在、利用者や地域の人の憩いの場所となるほか、子ども食堂や教室、キッチンスペースの貸出などといった、カフェだけでなく場所として利用されている。

■基本情報(表1)

正式名称: 風のえんがわ

施設規模: 地上2階建て

所在地: 〒206-0025 島根県江津市後地町2398

運営事業者: 個人

設計監理: ー

敷地面積: 1660m² (Googlemapより推定)

延べ床面積: ー

*1 東京電機大学 未来科学部 建築学科

*2 東京電機大学 未来科学部 建築学科 研究員



*3 東京電機大学 未来科学部 建築学科 教授・博士(工学)

*1 Undergraduate Stud., Dept. of Arch., School of Sci. and Tech. for Future Life, Tokyo Denki Univ.

*2 Research fellow, Dept. of Arch., School of Sci. and Tech. for Future Life, Tokyo Denki Univ., Dr.Eng.

*3 Professor, Dept. of Architecture, School of Science and Technology for Future Life, Tokyo Denki Univ., Dr.Eng.

表1 拠点概要

所在地	島根県 江津市	
建物規模	木造2階建て	
構造	木造	
運営主体	個人	
開所年月	2011年	
受付日時	毎週 水・木・金・土 (am11:00～pm18:00)	
スタッフ	アルバイト含み5～6人	
利用状況	通常：カフェ 他：・キッチンの貸出 ・子ども食堂 ・子どもの野菜を食べる教室 ・地元の人と交流をつかめる場所 ・コロナ生活の落ち着ける場所	
地域活性化	江津市役所が、地域活性化のために「創造力特区へ」というスローガンのもとはじめたプロジェクト「Go gotsu」が「風のえんがわ」を含めた様々な施設で自然と進められている。自らの創意工夫で新しいものを創り出す動きを発信している。	
	 <p>【外観写真】 元々家の前にも多くの植栽が植えられていたが、陽が入らなかったことから伐採している。</p>	元々養蚕小屋だった場所をリノベーションしたカフェ。養蚕小屋から民家への改修を経た後、オーナー自らベンキを塗るなど改修に携わり、古民家カフェとして生まれ変わった。土間をあがると、客席として畳の部屋に座卓、元縁側であった場所に机と椅子があり、子ども連れから高齢者まで多世代が居心地良く過ごせる空間である。縁側の先にある庭は緑豊かで子どもが遊べる空間にもなっている。
	 <p>【入り口】 駐車場に小さな看板があり、緑のトンネルを抜けた先に位置している。</p>	

構造：木造

開所：2011年

開館時間：毎週水・木・金・土 (am11:00～pm18:00)

スタッフ：アルバイトを含み5～6人程度

2. 島根県江津市について

島根県江津市は、高度経済成長期以降、都市部への人口流出が増大し、年々人口減少が進んでいる。現在山陰地方のなかではもっとも人口が少なく、さらに県内



Googlemap 画像 ©2023 CNES / Airbus, Maxar Technologies, Planet.com、地図データ ©2023

写真1 位置情報



Googlemap 画像 ©2023 Maxar Technologies, 地図データ ©2023

写真2 全体図

でも最も面積が狭い市である。また、「東京からいちばん遠い市」として教科書に掲載されたことでも知られる²⁾。一方で中国地方一の大河や海水浴場などをもち、多くの緑に囲まれた自然あふれる地域である。「風のえんがわ」も日本海が近く、山と海に囲まれた場所に立地している（写真1）。

3. 古民家カフェへの経緯

■古民家カフェができるまで

「風のえんがわ」がある後地町地域では以前は養蚕業が盛んで、使用されている建屋も元は養蚕小屋として利用されていた（よくある民家の上階が養蚕部屋ではなく、建物自体が養蚕「小屋」であった）。改修により民家として使われたのち、現オーナーである多田氏により現在のカフェに改修された⁵⁾。改修では、住宅の玄関部を土間に戻すなど、普通の昭和の家屋であった内外装を古民家の様相に戻すことを重視している。一方で、カフェとして利用できるよう、部屋を仕切っていたふすまは取り外し、広く自由に使えるようにした。また、台所は場所を変えず、厨房として再計画している。全体図を写

真2、1階の間取りを図1に示す。2階は大部屋が一室あり、子どもの椅子や遊具（写真4、写真5）などが置かれている。

■江津市での開業を決めた経緯

多田氏は自身が育った地元である島根の自然豊かな地域を子育ての環境としたい希望があった。そのため、地元である島根を拠点として、料理人の腕を活かした地域コミュニティの場となるカフェを開業した⁵⁾。

■Go Gotsu！プロジェクトの関わり

江津市ビジネスプランコンテスト（通称：Go-Con⁶⁾⁷⁾は、2010年にはじまり、急速な人口減少、伝統産業の衰退、若者の流出といった地域課題が山積みの中、定住対策には産業振興が欠かせないとの考え方から生まれた取り組みである。このコンテストに、2017年江津市では「Go!Gotsu! 山陰の創造力特区へ」という新たなスローガンをつくった。この「創造力」には、今までのやり方に捉われずにチャレンジ精神を持ってものごとを生み出す力、「特区」にはいろいろなやり方を認め合い、後押ししていくまちになるようにという思いが込められている。コンテスト形式で選考が行われ、採択された



写真3 店内写真

各事業が集会や話し合いなどといった自主的な活動を行っている³⁾。組織化された特定のグループが存在するわけではなく、江津の住民や多田氏のように江津で商売を営む人々の思いが繋がり進められており、市役所は見守りのポジションで緩やかに関わる(表1)。応募から始まりプランのブラッシュアップと様々な場面でプラン実現のためのフォローや仲間づくりが行われている。コンテストには、「江津市の魅力を活かしたプラン」、「江津市の課題解決を促進させるプラン」など同じ思いを持った人が集まり案を出し合い、またその実現に向かって各地で活動しているグループなどが出場する。必ず

しも江津出身である必要はなく、「江津市を盛り上げる」という思いがあれば、全国の人々が出場可能なコンテストである。こうした、担い手の多様性を受け入れる地域振興の雰囲気醸成されていることが、風のえんがわの開設のバックグラウンドになっている。

■具体的な改修内容

民家からカフェへ、細部まで多田氏のこだわりの詰まった改修が施されている。カフェの玄関である土間部分は木製の床が張られ、客席から一段下がった小さな舞台のような演出空間が創出されている。また、暖炉が設置されているなど、通常の靴を脱いで上がった客席と

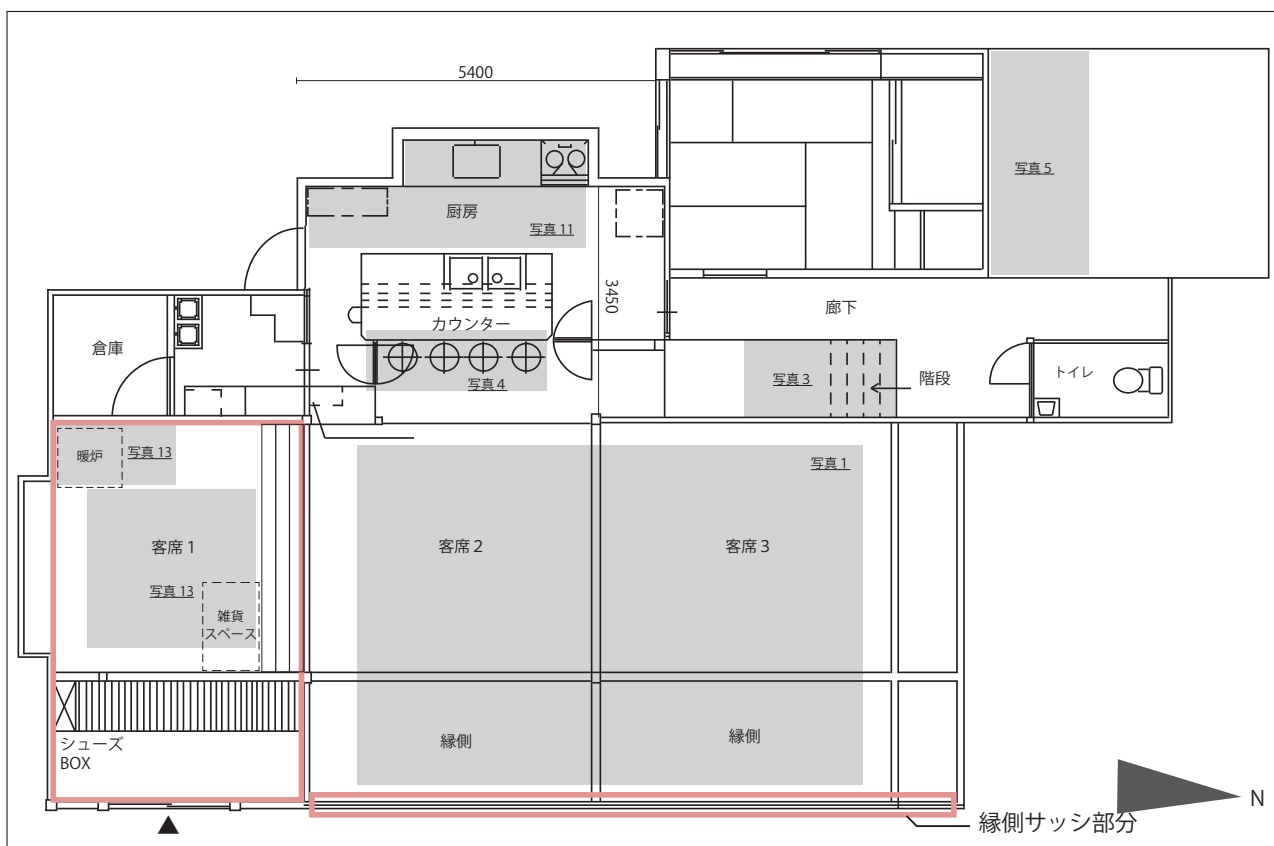


図1 1階平面図



写真4 子どもの遊び場① 2階



写真5 子どもの遊び場② 2階

は一味異なる客席となっている（写真6，写真7，図1・客席1）。「風のえんがわ」のメインとなる『縁側』部分は、古民家のテイストにあわせた木製サッシが使われている。元の一般住宅として使用されていた当時のアルミサッシをアセチル化木材^{注2}を使用した木製サッシに変更し、強烈な潮風や雨の影響による反りや歪み，気密性の低さなどを解消している。国内での取り扱いが少ないアセチル化木材木製サッシの導入ができる協力を得て，木製サッシの縁側が完成された。（写真8，写真9，写真10，図1・縁側）。

4. 利用層や運用について

■利用者の年齢層

県内外から利用者があり，県内からは，共働き世帯が多いことも影響し，育休中の方が子連れで訪れている。また，定年後の50～70代の主婦層の利用が多い。一方で，県外からは，近くに水族館があるため，広島など近隣県から子連れ世帯が水族館を訪れる際の行き帰りに立ち寄られている。また，ドライブ先として風のえん



写真6 土間部分の改修前（ピンクの囲い部分左側）



写真7 土間部分の改修後（ピンクの囲い部分左側）

がわを訪れる利用者も多い。

■新型コロナウイルスによる変化

多田氏によると，江津市では，2021年1月ごろまでCOVID-19（新型コロナウイルス）により対策や客席の距離，数などの調整はしつつも大きな影響はなかった。市街からやや離れた立地で営業しているためか，感染拡大防止の様々な制約から逃れてホッとした人や，他者と話がしたい人など，利用者からの多様な需要に触れ，コロナ禍以前とは異なる需要が発生していると感じた。店の営業自体に大きな変化はなかったが，多田氏夫妻にとっては，地域の中で店が持つ役割について考える契機となった。

■地域とつながる場

「風のえんがわ」の立地する浅利駅の地域には，自由に利用・滞在できる施設やカフェなどの商業施設が少ないため，この地域に移住などで引っ越してきた新しい住民にとっては，地域住民と出会い，交流する機会が乏しい。多田氏によれば，「風のえんがわ」をカフェやランチ利用で訪れた新規住民が既存住民と出会い，交流が生まれる様子が見られるほか，多田氏夫妻が交流のハブ役となって既存住民を紹介する場合もあるという。一方で，既存住民である常連の利用者からは「ここに来ると癒されて自分が元に戻る」といった声もあり，地域



写真8 えんがわ部分の改修前（ピンクの囲い部分右側）

の人々にとっての憩いの場として定着している様子がかがえる。このように、地域住民からは、カフェでありながら、地域のコミュニティスペースとしても位置づけられており、住民間に新たな関係性を築き、交流を醸成している。新規住民にとっては既存住民と知り合うことで地域での生活に安心が生まれ、既存住民にとっては気分転換やリフレッシュ、住民同士の交流を契機として地域活動に発展する場として、生活の質の向上に寄与している。

5. 空間のしつらえ

■カフェだけでない場所

カフェとしてオープンし、利用されてきたが、オープンから10年の間に、活動場所として風のえんがわを提供する機会が増えている。カフェの客としての継続的な利用や、カフェで発生した新たな交流をもとに利用者が「ここだったらできるかも!」と思い立ち、活動場所として利用しはじめるという現象に繋がっている。これまでに、子ども食堂、教室、子どもと野菜を食べるイベン

トなどの企画があり、客席部分のみの利用からキッチンスペースを含めての貸出まで、場所提供の形も様々である。また、子ども食堂などは継続的にこの場所を利用している。多田氏夫妻も元々ゆとりあるスペースを地域に向けて有効活用したいと考えていたが、飲食業との両立が難しい状況があった。その中で、利用者側から活動のために場所を借りたいという希望が生まれ、場所を貸し出すことでこうした多様な活動を応援できるようになった。利用者らの自発的な取り組みが喚起され、当初の予想以上にこの場所の活用の幅が広がっていることを、夫妻も喜ばしく思っており、元は飲食の場だけであったカフェが、場所の提供から別の役割を持つなど、多田氏夫妻の意図していないことがらが起こる場となっている。

環境の特徴としては、あえておしやれすぎない、程よく生活感があって、来訪者が気負わず馴染みやすい空間であるようにと意図している。むかしながらの民家の縁側がもっているような緩く人々を繋げる、気軽に利用できる空間として認知され、地域の”えんがわ”として



写真9 えんがわ部分の改修後① (ピンクの囲い部分右側)

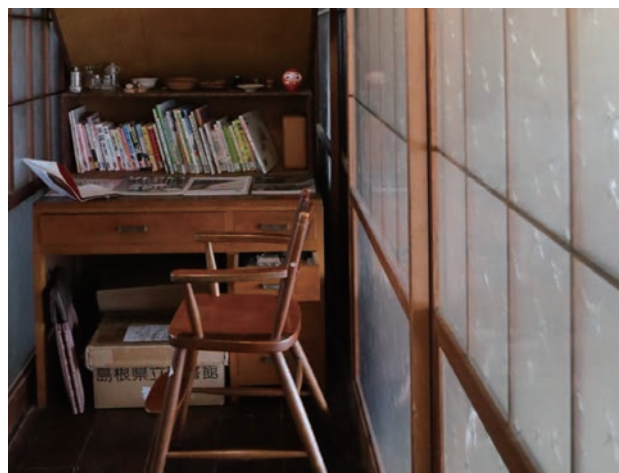


写真11 店内の様子①



写真10 えんがわ部分の改修後② (ピンクの囲い部分右側)



写真12 店内の様子②

利用されてる（写真3，写真11，写真12）。

■空間のこだわり

子連れで店を利用する層には、飲食の際に子どもが店内を汚したり内装や什器を傷つけてしまうという不安が大きい人が多い。そこで、多少汚したり傷つけても気にならない、おしゃれ過ぎず、きれいすぎないような場所にすることで、子連れでも気軽に来れるような場所になるようにと設えている。客室のテーブルや椅子なども全て異なった家具を使用しているほか、床座で畳に座れる場所があれば椅子座で気に入った椅子やテーブルを選んでくつろげるなど、来訪者が気分や用途、メンバーなどに応じて居場所の選択ができるように工夫されている。2階は、子連れの来訪者がグループで過ごせる場所にと床座で広く整えられている。

また、雑貨の展示ブースなど、地域とのつながりがみられる場もある（写真13）。また、客席としても使用している隣接した離れのような建物は、事業家であった家主がたばこ生産を営んでいた時代に、たばこの葉の乾燥小屋として使用されていた（写真14，写真15，図2）。当時乾燥室として使用された部屋の入口は熱気を



写真13 雑貨の展示ブース

逃さないように低く作られている。茶室のように屈んで入ると天井が高く、現在では開放的な6人掛けのテーブルのある空間である。火を起こしていた側にはカウンター席が並び、間の壁には熱を送る配管の穴が残るなど、当時の面影や元の建築の特徴をなるべく残し、それを活かしながら、多様な空間をつくっている（写真16）。キッチンには料理人として豊富な経験を積んだ多田氏が、自身が最も効率的に動けるよう、段ボールなどで1/1スケールの模型を作成して高さや配置を検討するなど、細部までこだわって計画された（写真17）。

■お気に入りのしつらえ

冬は暖炉の前（写真18）、春は2階の窓から見える木蓮の木（写真19）など、季節によって異なる。また、土間空間は畳空間の床の高さから一段下がる関係で場所の分節ができて「異なる場所」がある感覚や、畳空間と舞台-客席のような位置関係になるところが気に入っている（写真20）。

■大変なこと・良かったこと

大変なこと、楽しいこと、どちらも暮らしと仕事の差がない点である。大変なことも多いが、仕事として頼まれて、割り切ってやっているわけではなく、暮らしと思



写真14 たばこの乾燥室だった場所内観①



写真15 たばこの乾燥室だった場所の外観

いとやりたいことが一体化して日々過ごしている。

■庭

年に数回手入れを行う程度で、毎日手入れをしているわけではない。元々カフェになる前は、竹藪になっており陽も入らず、風も通らなかった。しかし、残せるものは残しつつ「風のえんがわ」という名の通り、風が通るように剪定を行い、空気が滞らないようにしている。また、ブランコなどがあり子どもが外で遊べる空間にもなっている。こどもが遊べる公園が遠いため、子どもが自然と一緒に育っていける場所として整備している（写真21）。季節の花が咲く庭を夫妻も子どもたちも大変気に入っている。庭の小屋ではヤギが飼われている。

■具体的な施設計画

「風のえんがわ」のメインである『縁側』部分は、日本家屋の一般的な利用方法としての日向ぼっこや、半屋外のような外と内の中間地点のような居場所として親しまれており、その空間としての利用も可能である。また、ゆとりのある奥行を持つ『縁側』だからこそ、テーブルと椅子を配置し、陽が差し込む縁側空間をふんだんに利用した客室となっている（写真22）。

■今後の展開

「風のえんがわ」をつくる前に、子どもたちに残せる資産として農業をはじめた。カフェの営業とあわせて、田畑をつくり、作農・収穫した作物をカフェで調理して食べる流れを想定していたが、カフェ営業との兼業は難しく、現在は休止中である。しかし、今後改めて農業をはじめたいと考えている。また、近くに丘陵の傾斜地を開いた牧場の採草放牧地があるため、いずれ馬を飼育してホースセラピーを行いたいと考えている。

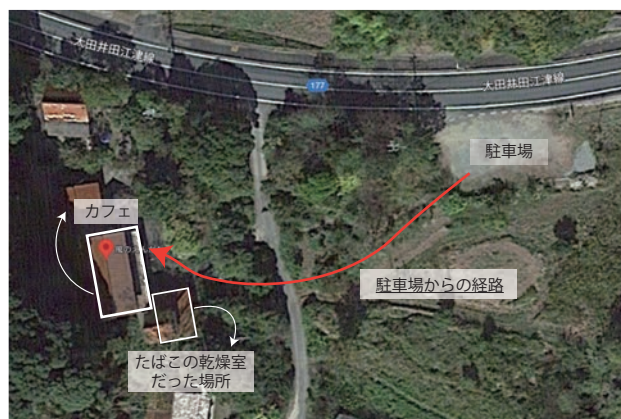


図2 たばこの乾燥室だった場所の位置関係



写真16 たばこの乾燥室だった場所内観②



写真17 こだわりのキッチン



写真18 暖炉前

6. 施設画上的結論

島根県江津市は、人口減少や少子高齢化の影響を受け、地域活性化に向けた取り組みを行っている。役所視点である行政のスローガンを主に、住民が自発的に愛着のある江津市の魅力を発信する行動は「風のえんがわ」を含めた住民の力で自発的に発信されている。

本事例では、日本家屋に備わる半屋外のような外と内との中間地点のような居場所である『縁側』を、カフェの客席として利用し、現代の居場所として再構築している点が特徴的である。従来、個（一家庭）と地域社会を繋ぐ場であった縁側が、地域コミュニティへの新規参入者や来訪者と地域住民を新たに繋ぐネットワークのハブ拠点として利用されている様子がわかる。このような、新たな交流の場の提供や多世代の利用者、多様な利用方法により、地域活性と地域住民の交流の輪が広がり続けている。I ターンの形で地域に戻り住民となった運営者による、「風のえんがわ」でのこれらの取り組みは、「小さな拠点」づくりで目指される、地域住民自らによる自主的な地域運営の場の創設や地域運営参画についての好例といえる。

謝辞

本研究にご協力いただきました皆様に、篤く御礼申し上げます。なお、本報告のための訪問調査は、科学研究費補助金（基盤 B）「自然形成される「小さな拠点」の実態（研究代表者：山田あすか）」の一環として行われました。

注釈

注1) 内閣府 HP では「小学校区など、複数の集落が散在する地域（集落生活圏）において、商店、診療所などの日常生活に不



写真 19 木蓮の木 2階



写真 20 土間空間

可欠な施設・機能や地域活動を行う場所を集約・確保し、周辺集落とコミュニティバス等の交通ネットワークで結ぶことで、人々が集い、交流する機会が広がっていく、集落地域の再生を目指す取組」と説明されている。

(国土交通省,「小さな拠点づくりガイドブック」【実践編】「小さな拠点」づくりガイドブック(概要),平成27年3月, <https://satodukuri.pref.shimane.lg.jp/www/contents/1594790146249/index.html>) 参考文献4)

注2) 食酢の成分である酢酸と木材成分の化学反応による処理を木材に施し、木材の寸法安定性、防腐・防蟻性、耐久性、耐候性を向上させる加工。日本での採用事例は少ない。参考文献8)9)

参考文献

- 1) しまねの郷づくり応援サイト, 平成30年, <<https://www.mlit.go.jp/common/001086374.pdf>>
島根県「小さな拠点づくり」モデル地区推進事業, <https://www.pref.shimane.lg.jp/admin/region/chiiki/chusankan/go_on/modelchilkubosyu.html> 2022年2月参照
- 2) 島根県江津市 <<https://www.city.gotsu.lg.jp/site/gotsu-navi/2208.html>> 2022年2月参照
- 3) Go Gotsu! 山陰の創造力特区へ <<https://go-gotsu.jp/>> 2022年2月参照
- 4) (国土交通省,「小さな拠点づくりガイドブック」【実践編】「小さな拠点」づくりガイドブック(概要),平成27年3月, <<https://satodukuri.pref.shimane.lg.jp/www/contents/1594790146249/index.html>> 2022年2月参照
- 5) 風のえんがわ <<https://go-gotsu.jp/kaze-no-engawa/>> 2022

年2月参照

- 6) てごねっと石見の活動日記 <https://blog.canpan.info/tegonet/category_15/1/> 2023年4月参照
- 7) Go-Con <<https://go-con.info/about/>> 2023年4月参照
- 8) 細田木材工業株式会社HP, アセチル化とは, <<https://accoya.woody-art.jp/acetylation/>> 2023年4月参照
- 9) 楽天ブログ <<https://plaza.rakuten.co.jp/kazenoengawa/diary/201209250000/>> 平成24(2012)年付け
2023年4月参照



写真 21 庭



写真 22 縁側